心のオアシス

モロッコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
心のオアシス

【Ｎコード】
Ｎ９７２７Ｎ

【作者名】
モロッコ

【あらすじ】
またまたオオカミさんと七人の仲間たちから涼子×亮士です。
今度は亮士君目線で行こうと思います。
まだまだ修行中の身なので、駄文ですがお付き合い願います。

（前書き）

頑張ります。
駄文ですが、お付き合い願います。

俺は、大の視線恐怖症だ。それは今でも変わることがない。
昔からまたぎの祖父から色々な事を教えられ、自らの知らないうちに視線に恐怖を覚えていた。
そんな中、叔母の村野雪女さんから御伽学園の方に来いと言われ、どんなふうになるのか自分でも分からないまま、とりあえずと言う感じであちらに行ってみた。

「怖いッス――――」

入学当初はずっと視線が恐ろしくて、クラスに溶け込むことしか考えていなかった。
変に目立って、この恐怖症の発作を起こしたくないがためだ。
そのためにはまず、人間観察。
人を観察し、その人たちに自分を似せればきっと目立つことはない。
そう思って俺は入学してから2週間、ずっと人を観察し続けた。

そんな中で、俺は涼子と出会った。

涼子はいつも一人。誰も寄せ付けようとはしなかった。
しかし、何か違和感があるのだ。
強がっているはずなのに心は弱い、人を自ら寄せ付けてないのにホントは来てほしい。
そんな違和感を覚えて、俺は彼女の背中を追ってみることにした。

追いかければ追いかけるほど、その違和感は疑問から確信に変わり、その理由を突きとめようとさらに彼女を追いかけるようになった。
そして気がついたら、俺は涼子のことをずっと追いかけ、いつの間

にか恋心さえ芽生えていたんだ。

告白したい、この気持ちを彼女に伝えたい――――
そんな気持ちすら、でてくるようになった。

でも、俺は目立つ事をするとあの発作が気がかりとなって思うような行動ができなくなっていた。
自分のこの恐怖症を、一番恨んだ時だった。
でも、言わなくちゃ気持ちは伝わらない。
言わなくちゃ、うんともいいえとも言ってくれない。
だから俺はあの日、彼女に、涼子に告白をした。

『お、俺は…涼子さんのことが好きッス…！！』

「あのときはどうしていいか、ほんとに分らなかったッスよ…」

「あのときは男が嫌いだったからなぁ…ホントに。」

「でも森野君のおかげで涼子ちゃんは今見たいなことができるようになってんですのよ？」

俺は今、御伽銀行地下本店で涼子と赤井さんと雑談をしている。
今日の担当は2年生で、頭取さんやアリス先輩は俺達を気遣ってからか、地下本店から席をはずしていた。
そして、今の状態を伝えるとするならば――――

「それにしても涼子ちゃん、ほんとに変わりましたの～」

「い、いいだろ！別にっ！」

「そんなこと言っても、私がいる目の前で森野君の腕に絡んでいる所を見ると、呆れというか…」

「あ、呆れって何だよ！呆れって！」

「ホント、涼子ちゃんと森野君は幸せ者なんですのねぇ～…」

「う、うるさいっ！」

今、赤井さんが説明してくれた通りの状態となっている。
あの時から俺は、この御伽銀行の一員となり、たくさんの仕事を涼子と赤井さんとやってきた。
その中で、彼女の違和感の元凶である羊飼と出会い、討伐。
そんなこともたくさんあって俺達は今、こうして『付き合う』という状態になっている。

「り、亮士がいいって言ってたから…」

「だからやったんですの？」

「そ、そうだ！何か悪いか！」

「いいえ～。そんなことはないんですのよ～」

「な、なんだよ！その何か言いたげな目は～！！」

「まぁまぁ、二人とも落ち着いて…」

「あらあら涼子ちゃん、未来の旦那になだめられてますの～」

「りんごてめぇ…！！」

「キャ～！！」

「間違いじゃないッスけどね…」

「ほら、森野君も言ってますのよ～」

「ムムム…／／／」

「照れてる涼子さんは、いつ見てもかわいいッス♪」

「いつ見てもって言うことは、いつも照れるようなことを森野君は言っていますの？」

「えぇ。いつも顔を真っ赤にして俺のほっぺをつねって…ってイテテテテっ！！」

「二人きりの時のことを言うなっていつも言ってんだろ！／／／」

「ご、ごめんごめん…」

「二人きりとか…。ホントに涼子ちゃんは幸せ者ですの♪」

この二人との会話は絶えることのない。
この時間が二番目に大切で、この時がなければ今の俺と涼子の関係は絶対にあり得ない。

でもこれは二番目に大切なこと。
一番はやっぱり…

「涼子さん、ジムが終わったらメールしてほしいッス。」

「おぅ。また雪女さんの所に遊びに行かせてもらうよ。」

「雪女さんの所じゃなくて…森野君のところでしょ？」

「そ、そうだけど口実としてりんごに言わないと…ってりんご！」

「なんですの？」

「なんでこの事を…！！」

「なんでって…涼子ちゃんの素行なんて全部お見通しですの♪」

「…／／／／／／」

涼子との二人きりの時だな。
なんたって涼子を一人占めできるんだから。
これからの未来を一緒に歩んでいく、未来の妻と一緒に過ごすのは別に構わないだろ？

俺の心のオアシスは、いつだってこんな他愛のない、大切な時間だから。

（後書き）

どうでしたか？
よければ感想、お願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9727n/

心のオアシス

2010年11月2日14時06分発行